

胚種の中にある「形成の力」(*virtus formativa*)

——トマス・アクィナスにおける人間の産出理論——

井 上 淳

序

トマス・アクィナスは人間の産出について、それを生殖 (*generatio*) による産出と、神の創造 (*creatio*) の業による産出との両方の側面からとらえている。トマスによれば、人間もまた動物一般に共通の仕方、すなわち生殖という仕方ですその両親から生まれるのであるが、人間の場合、その理性的魂は他の動物とは全く異なる仕方です産出される。すなわち、人間の理性的魂は非物体的であるが故に、両親から物的な仕方です生み出されることは出来ず、ただ神の直接的な創造によってのみ生み出され得るとされる。それによって各人はそれぞれ、個別的なかけがえのない魂を有する人格的存在となるのである。しかしながらトマスは、受胎の瞬間が神によって理性的魂が創造される時であるとはしていない。トマスによれば、理性的魂が創造されて身体に注入されるのは、胎児の身体がそれを受け取るのに相応しく態勢づけられた時なのであり、受胎後しばらくの準備期間がそこに置かれているのである¹⁾。したがって、ひとりの人間が完全な意味での人格的存在として誕生するのは、トマスによれば受胎の瞬間ではないことになる²⁾。

胎児はしかし、受胎の瞬間から新たな生命を生きる者として存在し、成長のはたらきを有する。したがって、生命のはたらきを有する存在として、胎児は理性的魂を受け取る以前にも、すでに何らかの魂を有しているのだからなければならない³⁾。その魂はどこから生じるのか。トマスによれば、胚種

の中に能動的な力 (*vis activa*) があり、それが胎児の身体を態勢づけ、栄養摂取と感覚的能力をはたらかせ得る魂をそこに生じさせるのである。この力をトマスは「生みの力」(*virtus generativa*)あるいは「形成の力」(*virtus formativa*)と呼んでいる。本稿ではトマスが人間の産出においてこの「形成の力」を如何なるものとして捉え、また如何なる役割をこの力が果たす

-
- 1) *ST* I, q. 100, a. 1, ad 2 を参照。なお、本稿において用いられるトマスの著作は次の通りである。脚注においては、括弧内に示す仕方でも略記される。『命題論集注解 *Scriptum super libros Sententiarum*』(*Sent.*)、『対異教徒大全 *Summa contra gentiles*』(*SCG*)、『神の能力について *Quaestiones disputatae de potentia Dei*』(*QDP*)、そして『神学大全 *Summa theologiae*』(*ST*)。J-P. Torrell によると、それぞれの著作の執筆時期は、『命題論集注解』(1252-54)、『対異教徒大全』(1260-65)、『神の能力について』(1265-66)、そして『神学大全』第1部(1266-68)である。Jean-Pierre Torrell, *Saint Thomas Aquinas Vol. 1, The Person and His Work*, trans. Robert Royal (Washington, DC: The CUA Press, 1996)を参照。なお、本稿を書くにあたって用いたトマスのテキストの版は次のとおりである。*Summa theologiae* はいわゆるレオ版 *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia*, Leonine edition (Rome: Leonine Commition, 1882-)を、*Summa contra gentiles* と *Quaestiones disputatae de potentia Dei* はマリエッティ版、すなわち *Liber de Veritate Catholicae Fidei contra errores Infidelium seu <Summa contra Gentiles>*, *Textus Leoninus diligenter recognitus*, ed. Ceslaus Pera, Petro Marc, and Petro Caramello, Vol. II (Turin: Marietti, 1961)、および、*Quaestiones disputatae*, vol. II, ed. P. Bazzi et al. (Turin: Marietti, 1965)を、そして *Scriptum super libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi* (『命題論集注解』)は、第2巻は P. Mandonnet と M. Moos による版、*Scriptum super libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi* (Paris: Lethielleux, 1929-47)を、第4巻は Vivès 版 *Opera omnia XI* (Paris: Ludovicum Vivès, 1874)を用いた。
 - 2) 現代の教皇庁の立場はトマスの見解とは異なっている。教皇庁教理省は『生命のはじまりに関する教書』(カトリック中央協議会、1996年)において、「人間の生命が初めに現れた瞬間から、そこに一つの人格を見いだすことができる」とし、「人間の生命は、その存在の瞬間から、すなわち接合子が形成された瞬間から、肉体と精神とからなる全体性を備えた一人の人間として、倫理的に無条件の尊重を要求するのであり、「受精卵は人間として扱われるべきである」と宣言しているからである(20-21頁)。しかしトマスが胎児の存在を軽視していたわけではない。教理聖省による『墮胎に関する教理聖省の宣言』(カトリック中央協議会、1974年)にも指摘されているように、トマスは「墮胎を自然法に反する重い罪であると教えている」のである(4頁)。IV *Sent.* d. 31, *Expositio textus* (*Opera Omnia*, vol. XI, pp. 127-28)を参照。
 - 3) この点については、*QDP*, q. 3, a. 9, ad 9 特に D) *Alii vero dicunt* 以下を参照。

としているのかを探求していきたい。更に、トマスが初期の著作と後期の著作で、この「形成の力」に関して異なる立場をとっていると思われるため、そのことについても考察したい。

I

トマスは胚種(*semen*)という言葉を用いて、生殖における男性の側の能動的根源と女性の側の受動的根源の両方を包括した意味で用いている。それは、『神学大全』に次のように述べられているところから明らかである。

「男性の胚種 (*semen*) は動物の生殖 (*generatio*) における能動的根源である。しかしまた、受動的根源たる女性の側に由来するところのものも胚種(*semen*)と呼ばれ得る。このように、能動的な力も受動的な力も共に胚種のもとに包括され得る。」⁴⁾

同様の主張はトマスの初期の著作である『命題集註解』にもすでに見られる⁵⁾。胚種とは生物がそこから生まれる能動的および受動的な根源を指しているものであり、トマスはこの概念をアウグスティヌスの「胚種的な理法」(*rationes seminales*)の考えから継承していると思われる⁶⁾。このような意味での胚種の中に、初めから存するとされているのが「形成の力」な

4) *ST I*, q. 115, a. 2, ad 3: "... semen maris est principium activum in generatione animalis. Sed potest etiam dici semen id quod est ex parte feminae, quod est principium passivum. Et sic sub semine comprehendi possunt vires activae et passivae."

5) Cf. *II Sent.*, d. 18, q. 1, a. 2, ad 4: "... sub rationibus seminalibus comprehenduntur tam virtutes activae quam etiam passivae, quae perfici possunt per agentia naturalia; sicut et in generatione animalis semen extento nomine dicitur non solum pserma, sed etiam menstruum."

6) *ST I*, q. 115, a. 2, cor. を参照。アウグスティヌスの胚種的理法の考えは、『三位一体論』第3巻第8章、『創世記逐語的註解』第5巻第4章第9節などに見られる。

のである。

トマスはアリストテレスの『動物生成論』にしたがって⁷⁾、胎児の質料は母親によって提供され、その質料を形相づける能動的な力は父親から出ると考えていた。「男性の胚種のうちに能動的な力がある。胎児の質料はこれに対して、女性によって提供されるところのものである」⁸⁾。胚種のうちに存する能動的な力、すなわち形成の力は、それ故、生むもの (*generans*) である父親の魂から派出するものとされている。「胚種の内にある能動的な力は生むものの魂から派出するところのものであり、いわば、生む魂そのものの或る活動 (*motio*) である」⁹⁾。

注目すべきと思われるのは、この形成の力が胎児が有する魂とは区別されている点である。トマスによると、それは「魂でもなければ魂の部分でもない」ものなのである¹⁰⁾。すなわち、身体の内には、魂とは別の能動的根源があるとされているのであり、その能動的根源が、受胎後直ちに身体を態勢づけ、生育に必要な魂を生じさせる重要な役割を果たすとされるのである。

II

『命題論集注解』第2巻第18区分第2問題第1項において、人間の魂が両親によって産出されるか否かという問題について論じられているが¹¹⁾、トマスはそこで、人間の理性的魂は両親からの伝移 (*traductio*) によるの

7) アリストテレス『動物生成論』第2巻第3章と第4章を参照。

8) *ST I*, q. 118, a. 1, ad 4: "... virtus activa est in semine maris... ; materia autem foetus est illud quod ministratur a femina."

9) *ST I*, q. 118, a. 1, ad 3: "... illa vis activa quae est in semine, ex anima generantis derivata, est quasi quaedam motio ipsius animae generantis."

10) *ST I*, q. 118, a. 1, ad 3: "... nec est anima, aut pars animae."

11) "Utrum anima humana traducatur a parentibus." この "traducere" という言葉には「伝移的な産出」という意味合いが含まれている。横山哲夫訳『神学大全』第8冊 (創文社, 1987年), 訳者註 596 (358頁) を参照。

では決してなく、ただ神の創造によってのみ生み出され得ると主張している。魂あるものの生成 (*generatio*) において伝移ということが言われるのは胚種が離れ去ること (*decisio*) によってであり、それは分裂という仕方 (*per modum divisionis*) によるものであることがまず指摘される。そしてこの分裂による伝移には自体的 (*per se*) な仕方と附帶的 (*per accidens*) な仕方があり、自体的に伝移されるのは身体であり、附帶的に伝移されるのは質料に刻印された身体的形相であると述べられている¹²⁾。動物一般においてはこの身体的形相がすなわち魂である。しかしながら人間の理性的魂はそれとは異なる。トマスは次のように言っている。

「理性的魂は物体でもなければ物体的な力でもない。それが身体に依存しない魂自体のはたらきであることは明らかである。それ故、魂が分与という仕方では伝移されることはありえない。」¹³⁾

理性的魂は非物体的であり、物体からは決して生じ得ないことから、人間の場合には両親の魂が子供の魂の根源であることは在り得ないとトマスは主張するのである。

しかしながら、先にも述べたようにトマスは、人間は受胎の瞬間から理性的魂を有するとはしていないのであり、理性的魂が神の創造によって注入されるまでは、他の動物と同様の仕方では人間の身体は魂を持つとしているのである。『命題論集注解』同巻、同区分、同問題の第3項において、トマスはこう言っている。

「胚種の伝移の仕方は人間の場合も他の動物たちの場合も同様であ

12) Cf. *II Sent.*, d. 18, q. 2, a. 1, cor.

13) *II Sent.*, d. 18, q. 2, a. 1, cor. : “Anima vero rationalis nec corpus est, nec virtus corporalis; quod ipsa sua operatio ostendit, quae sine corpore est; et ideo traduci non potest per modum divisionis.”

る。なぜなら、人間の胚種の中にも他の動物と同じように形成の力 (*virtus formativa*) があるからである。しかしながら前述したようにこの力の作用は質料的なのであるから、非質料の本質へとその作用が達することは出来ない。その力の作用によって生じるのは、まず第一に栄養的生命 (*vita nutritiva*)、そしてその後に感覚的生命 (*vita sensitiva*) である。」¹⁴⁾

このようにトマスは、理性的魂を受ける前の段階で、胎児が栄養的な生命と感覚的な生命を生きているのであり、すなわち胎児が理性的魂を受ける前に、栄養的魂と感覚的魂とを有するとし、そのような魂は、胚種のなかにある形成の力によって生じているのである。

トマスに特徴的であると思われるのは、このように初めは栄養的魂、次に感覚的魂、そして最後に理性的魂という具合に、人間は次第に完全性の高い魂を有するようになるとしているのであるが、それは同じ一つの魂が次第に発達していくのではなく、新しいものが古いものと入れ替わるという仕方であるとされている点である。同じひとつの身体には複数の魂が存し得ないことから、初めの栄養的魂は感覚的魂が生じると共に消滅する。そして感覚的魂は、感覚的であると同時に栄養的でもある魂なのである。感覚的魂が理性的魂に変わる時には、この入れ替わりはより本質的なものである。感覚的魂が質料的であるのに対し、理性的魂は非質料的だからである。トマスは次のように言っている。

「第二の完全性が到来するに際しては、第一の完全性は同じものとし

14) *II Sent.*, d. 18, q. 2, a. 3, ad 4: “Sed tamen modus traductionis seminis est similis in homine et in aliis animalibus; quia in semine hominis est etiam virtus formativa, sicut in animalibus; sed quia actio illius virtutis est materialis, ut dictum est, non potest actio ejus pertinere ad essentiam immaterialem; sed tamen per actionem hujus virtutis primo consequitur conceptus vitam nutritivam et postea vitam sensitivam.”

ては残らず、第二のものに包括されてしまうのである。このように、理性的魂の注入によって、人間はその魂のひとつの本質の内に感覚的魂も栄養的魂も包括することになる。先行する諸々の完全性は同じものとしては残らないのである。」¹⁵⁾

トマスによれば、質料的魂が発達して非質料的魂になることは不可能なのであり、それまでの感覚的魂は消滅して、まったく新たな理性的魂が到来するのである。この理性的魂は最も完全性の高いものであり、理性的であると同時に感覚的であり、また同時に栄養的でもあるという仕方で、より下位の魂の完全性を包括して有する魂である。このような理性的魂を有するようになるのは、人間だけである。したがってまだ理性的魂を受ける前には動物と同様の感覚的魂しか有さないとは言っても、その魂は他の動物に較べてはるかに高貴な魂なのである¹⁶⁾。

トマスは『対異教徒大全』および『神の能力について』においても、ほぼ同様の立場をとっている。理性的魂の到来によって人間の魂はそれまでの感覚的魂が消滅し、理性的であると同時に感覚的・栄養的な魂がそれに取って代わるとされている。『神の能力について』第3問題第9項において、トマスは次のように言う。

「(動物の場合の)産出は単純ではなく、複数の生成と消滅がそこには

15) *II Sent.*, d. 18, q. 2, a. 3, ad 4: "... quando venit ad secundam perfectionem, prima perfectio non manet eadem numero, sed acquiritur simul cum acquisitione secundae; et sic patet quod in infusione animae rationalis homo simul consequitur in una essentia animae animam sensitivam et vegetativam; et priores perfectiones non manet eadem numero."

16) この点については、次の箇所を参照。*QDP*, q. 3, a. 11, ad 1: "... anima sensibilis in hominibus et brutis sit eiusdem rationis secundum genus, non tamen est eiusdem rationis secundum speciem, sicut nec idem animal specie est homo et brutum; unde et operationes animae sensibilis sunt multo nobiliores in homine quam in brutis..."

含まれている。というのも、すでに証明されたように、同じ一つの実体的形相が漸進的に現実態に導き出されることは不可能だからである。それ故、胚種の中に初めからある形成の力によって、精子の形相は取り除かれて別の形相が現れ、この形相が取り除かれて、次の形相が現れる。このようにして自育的魂が最初に現れる。そしてこの魂が取り除かれて、感覺的であると同時に自育的でもある魂が現れる。そしてこの魂が取り除かれて、今度は胚種の中の力によってではなく創造主によって、理性的であると同時に感覺的でもある魂が現れるのである。」¹⁷⁾

前述したように、トマスはこのような胚種の中に初めから存する能動的な形成の力を、胎児の内に現れる魂そのものとははっきりと区別している。『対異教徒大全』においてトマスはそのことについて次のように言っている。

「胚種と共に分離し、形成の力と呼ばれるこの力そのものは、魂でもなければ、生成の過程で魂になっていくものでもない。それは、胚種に泡のような形で含まれる精気 (*spiritus*) に、それを固有の主体として基づくものである。この力が身体の形成を行うのであるが、それは産出の根源としての父親の魂の力によるものであり、生み出された者の魂の力によるものではない。そしてこの力は魂の内在後にもはたら

17) *QDP*, q. 3, a. 9, ad 9: “Et sic oportet quod huiusmodi generatio non sit simplex, sed continens in se plures generationes et corruptiones. Non enim potest esse quod una et eadem forma substantialis gradatim educatur in actum, ut ostensum est. Sic ergo per virtutem formativam, quae a principio est in semine, abiecta forma spermatis, inducitur alia forma; qua abiecta, iterum inducatur alia: et sic primo inducatur anima vegetabilis; deinde ea abiecta, inducatur anima sensibilis et vegetabilis simul; qua abiecta, inducatur non per virtutem praedictam sed a creante, anima quae simul est rationalis sensibilis et vegetabilis.”

く。なぜなら生み出された者は自らを産出するのでなく、父親によって産出されるからである。」¹⁸⁾

トマスが形成の力は父親の魂の力によるものであるとし、胎児の魂そのものとは別のものとしていることは、この言葉から明白である。トマスによると、身体の形成に関わるのは魂よりもむしろ、父親の魂に由来する胚種の中のこの形成の力なのである。「身体の形成は胎児の魂に帰すことができない」とトマスは言う¹⁹⁾。なぜかといえば、魂は確かに成長のために必要な栄養摂取や感覚のはたらきを行うのであるが、身体の態勢づけ、あるいは形成ということは、それとは別の事柄だとされるからである。子供が親に似たものとして形成されるということは子供の魂のはたらきそれ自体ではなく、親の魂から派生する形成の力によるものであるとトマスは言っている。

「したがって、身体の形成は、特にその始まりと主要な点に関しては、生み出された者の魂によるものではなく、またその当の魂そのものの形成の力によってでもなく、父親の魂からの形成の力によるであり、その作用が親に種的に似たものを産出するはたらきをなす、としなければならぬ。」²⁰⁾

18) SCG II, c. 89, #1742(a): “Non igitur ipsamet virtus quae cum semine deciditur et dicitur formativa, est anima, neque in processu generationis fit anima: sed, cum ipsa fundetur sicut in proprio subiecto in spiritus cuius est semen contentivum, sicut quoddam spumosum, operatur formationem corporis prout agit ex vi animae patris, cui attribuitur generatio sicut principali generanti, non ex vi animae concepti, etiam postquam anima inest; non enim conceptum generat seipsum, sed generatur a patre.”

19) SCG II, c. 89, #1742(b): “Non enim potest attribui animae embryonis.”

20) SCG II, c. 89, #1742(c): “Relinquitur igitur quod formatio corporis, praecipue quantum ad primas et principales partes, non est ab anima genti, nec a virtute formativa agente ex vi eius, sed agente ex vi animae generativae patris, cuius opus est facere simile generanti secundum speciem.”

このように、身体がどのような姿形で形成されるかということは、魂のはたらきとは別の能動的根源によるものであり、それは父親の魂の力から派生した胚種の中の形成の力であるとされている。トマスはここで、「特に、魂の感覚的部分と知的部分は、明らかにこのような形成に適合するはたらきを持たない」とさえ言っており²¹⁾、身体の形成というはたらきを、魂のはたらきから全面的に区別する立場が取られているのである。

したがって、この形成の力は身体の中に魂と共に共存することが必然的に帰結する。「この形成の力は上述の精気の中に、身体の形成の初めから終わりまでずっと残る」とトマスはここで主張している²²⁾。そのことは理性的魂が注入された後も同様である。「胚種の中に初めから存する形成の力は、理性的魂の到来の後も存続する」と、トマスは『神の能力について』において述べている²³⁾。

さて、ここまでのトマスの言葉から、形成の力とはどのようなものとして理解され得るであろうか。現代的な言い方をすれば、それはちょうどDNAのようなものとして考えることができるかも知れない。親から子へと伝移される、いわば身体的设计図のようなものとしてである。子が親に似るのは、この遺伝子のごとき「形成の力」によって身体が態勢づけられるからであり、この形成の力は、身体が滅びてこの世の生命が終了するまで、ずっと身体の内において続けるとされているのである。このように形成の力が、生み出されたものの魂とは別個のものとして存在するとされていることによって、人間の産出における生殖 (*generatio*) の側面の意義が明らかとなる。理性的魂が創造によって生み出されるということが個々の人間の個別的な存在の証となっているのに対し、生殖という親から子へと

21) SCG II, c. 89, # 1742(b): “De sensitiva autem et intellectiva particula, patet quod non habet aliquod opus formationi tali appropriatum.”

22) SCG II, c. 89, # 1743: “Haec igitur vis formativa eadem manet in spiritu praedico a principio formationis usque in finem.”

23) QDP, q. 3, a. 9, ad 16: “... virtus formativa quae in principio est in semine, manet adveniente etiam anima rationali.”

いう系列による人間の産出が、この「形成の力」の措定によって、身体と魂とから成る全的人間の出生に不可欠のものとして明示されているのである。

III

しかしながら、トマスは、後期の著作である『神学大全』において、自らの立場に一つの変更あるいは改良を加えているように思われる。胚種中の形成の力についてトマスの見解は、主に『神学大全』第1部第118問題と第119問題に見出される。ここでもトマスは、生むものの魂から或る能動的な力が胚種へと派出し、その力によって感覚的魂が生じるとしている。

「生むもの (*generans*) は生まれるもの (*generatum*) に似ているのであるから、感覚的魂も他の諸々の (自存的ではない) 形相と同様、質料を可能態から現実態へと移行させる何らかの物的能動者によって、この能動者の内に存する何らかの物的な力で存在へと産出されることが自然本性的に必然である。」²⁴⁾

ここで言われている「物的な力」(*virtus corporea*) とは、すなわち胚種の中に存する形成の力である。トマスによれば、「生むものが生まれるものに似ているのは質料の故ではなく、自らに似たものを生む能動者の形相の故である」²⁵⁾。だから親に子が似るのは、胚種の身体的な質料が親の中に

24) *ST* I, q. 118, a. 1, cor.: “Et quia generans est simile generato, necesse est quod naturaliter tam anima sensitiva, quam aliae huiusmodi formae, producantur in esse ab aliquibus corporalibus agentibus transmutantibus materiam de potentia in actum, per aliquam virtutem corpoream quae est in eis.”

25) *ST* I, q. 119, a. 2, ad 2: “... assimilatio generantis ad genitum non fit propter materiam, sed propter formam agentis, quod generat sibi simile.”

あったからではなくて、親の魂に由来する形成の力が胚種の内に存しているからなのである²⁶⁾。それ故トマスは、「胚種の内存する能動的な力は、生むものの魂から派出する一種の刻印付けである」と言う²⁷⁾。

胚種の中の形成の力が魂とは別のものであるとされていることも、他の著作と同様である。トマスは次のように言っている。

「(女性によって提供された)質料のうちに、栄養的魂は初めから直ちに内在している。それはちょうど感覚的魂が眠っている者におけるがごとく、第二現実態としてではなく、第一現実態としてである。栄養を取るようになって初めて、それは現実的にはたらく。このような質料が男性の胚種の内存する力によって転ぜられて、感覚的魂の現実態にまで導かれるのである。胚種の内存する力そのものが感覚的魂になるのではない。」²⁸⁾

栄養的魂と感覚的魂は胚種の中の形成の力によって生じるが、人間の理性的魂はしかし、神の創造によってのみ産出されるという主張も同様になされている。理性的魂が形成の力によって産出されることができないのは、「質料において在る能動的な力が、自らの力を非質料的な結果の産出にまで及ぼすことは不可能だから」である²⁹⁾。

しかしながら、『神学大全』において、トマスの見解が先に見た著作と異

26) Cf. *ibid.*

27) *ST I*, q. 119, a. 1, cor. : “... virtus activa quae est in semine, est quaedam impressio derivata ab anima generantis.”

28) *ST I*, q. 118, a. 1, ad 4: “In qua quidem materia statim a principio est anima vegetabilis, non quidem secundum actum secundum, sed secundum actum primum, sicut anima sensitiva est in dormientibus. Cum autem incipit attrahere alimentum, tunc iam actu operatur. Huiusmodi igitur materia transmutatur a virtute quae est in semine maris, quousque perducatur in actum animae sensitivae: non ita quod ipsamet vis quae erat in semine, fiat anima sensitiva.”

29) *ST I*, q. 118, a. 2, cor. : “... impossibile est virtutem activam quae est in materia, extendere suam actionem ad producendum immaterialem effectum.”

なっている点の一つがある。それは、胚種の中の形成の力が、魂が生じてきた後に消失するとされている点である³⁰⁾。先に見たように、『対異教徒大全』および『神の能力について』においてトマスは、胚種の中に存する形成の力は魂が生じた後も存続し、魂と共存するとしていたのである。ところが『神学大全』においては逆に、この力は魂とは共存せず、途中で存在しなくなる (*esse desinit*) と主張されているのである。トマスは次のように述べている。

「胚種の内蔵していた能動の力は、しかし、胚種が解消し、内在していた精気が消散するに至って存在を終える。これは決して不都合なことではない。なぜなら、こうした力は根源的な能動者なのではなく、むしろ道具的な能動者なのであるし、道具の動きは、結果がすでに産出されるに至って止むものだからである。」³¹⁾

つまりここでトマスは、胚種のうちに存在する形成の力によって初めは栄養的魂が、そして次に感覚的魂が生まれるもののうちに産出されるとしている点では先にみた著作と同様なのであるが、形成の力のその後の経過をどうとらえるかという点で、他の著作とは異なっている。トマスによれば、感覚的魂が産出されるに到った後は、今度は「形成の力」に代わってその感覚的魂が、栄養摂取や成長という仕方で、自らの身体を完成するためにはたらき始めるのであり、このとき、胚種の中の力は自らの役割を終えて消滅するのである。

30) この点に関してトマスの見解に相違が見られることは, Petrus de Bergamo, *Tabula Aurea Eximii Doctoris*, in *Opera Omnia* Vivés Edition, Vol. 33-34, 1880; reprint, Roma: Editiones Paulinae, 1960 においても指摘されている。D. 1117-18, 18 and 19 (873 頁) を参照。

31) *ST* I, q. 118, a. 1, ad 4: “Virtus autem activa quae erat in semine, esse desinit, dissoluto semine, et evanescente spiritu qui inerat. Nec hoc est inconveniens: quia vis ista non est principale agens, sed instrumentale; motio autem instrumenti cessat, effectu iam producta in esse.”

「胚種のうちに存していた能動的根源の力によって、生まれるものうちに、感覚的魂がその何らかの根源的な部分に関する限り産出されるに到った後は、今や子供のその感覚的魂が、栄養摂取や成長という仕方で、固有の身体を完成するためにはたらき始める。」³²⁾

上に引用したトマスの言葉は、異論への返答として述べられたものである。その異論とは次のようなものである。もし感覚的魂を生ぜしめる何らかの能動的根源が、魂が生じた後も、魂とは別の存在として胚種の中に存続するならば、一つの動物の内に複数の形相的根源があることになってしまうが、これは不可能だという意見である³³⁾。この意見に対する答えとして、トマスは上のように、胚種の中の形成の力は感覚的魂の生成に伴って存在を終えると述べているのである。つまりトマスは、一つの身体の内形相的根源はただ一つだけしか在り得ないという、彼自身主張している立場との矛盾をさけるために、あるいはそのような誤解が生じるのをさけるために、形成の力という能動的根源を魂と共存させる立場に変更を加えたと解釈できるであろう³⁴⁾。トマスが以前、胚種の中の形成の力においていた身体の形成という役割を、上位の形相たる魂に包括させることによって、一つの身体の中に複数の形相的根源が存在するという問題が回避されるのである。

このように、『神学大全』においては、胚種の力はかなり制限されたものとされており、むしろ魂のはたらきが強調されている。胚種の力のはたら

32) Ibid: "Postquam autem per virtutem principii activi quod erat in semine, producta est anima sensitiva in generato quantum ad aliquam partem eius principalem, tunc iam illa anima sensitiva prolis incipit operari ad complementum proprii corporis, per modum nutritionis et augmentii."

33) ST I, q. 118, a. 1, arg. 4 を参照。

34) 一つの身体の内形相的根源はただ一つだけしか在り得ないという主張は、ST I, q. 76, a. 4 においてなされている。この主張はしかし、『神学大全』でだけ主張されていることではなく、すでに初期の著作にもみられる。IV Sent., d. 44, q. 1, a. 1, qa. 1, ad 4 および SCG II, c. 68-75 を参照。

きは、魂のはたらきの前段階的なものに過ぎないとされているのである。

『対異教徒大全』と『神の能力について』において主張されていた、魂の能力と形成の力のはたらきとの区別は、ここでは影をひそめてしまっている。

トマスは次に続く第二項において、知性的魂は人間の身体の形相であるが、身体は胚種の力によって形成される、それ故に知性的魂もまた胚種の力によって原因されるはずであるという異論に答えて³⁵⁾、次のように述べている。

「こうした論は、相互の間に秩序づけがない諸々の能動者の場合ならば妥当し得る。しかしそれらの能動者の間に秩序づけがある場合は、そうではない。動物の出生において、胚種の力は質料を態勢づけるものであり、魂の力はこれに対して、形相を与えるものであるというように、上位の能動者の力は究極の形相にまで達するが、下位の能動者の力はこれに対して、単に質料の何からの態勢づけに達するに留まるとして、何ら不都合はない。」³⁶⁾

ここで言われているように、胚種の中に存する形成の力は、魂の力より下位のものとしてとらえられており、その役割は質料を態勢づける (*disponere*) ことのみ制限されている。形相の根源は、上位の能動者である魂があるだけで充分であり、質料が態勢づけられた後は、胚種の力もはや不要となるというわけである。

35) その異論は、ST I, q. 118, a. 2, arg. 3 に挙げられている。

36) ST I, q. 118, a. 2, ad 3: "... ratio illa locum habet in diversis agentibus non ordinatis ad invicem. Sed si sint multa agentia ordinata, nihil prohibet virtutem superioris agentis pertingere ad ultimam formam; virtutes autem inferiorum agentium pertingere solum ad aliquam materiae dispositionem; sicut virtus seminis disponit materiam, virtus autem animae dat formam, in generatione animalis."

トマスのこの新たな主張は、魂が身体の唯一の実体的形相であるという立場の徹底化であるとも言えるであろう。これによって、個別的に創造される理性的魂のみが個々人の形相的根源となるのであり、個別的人格が強調されることにもなる。子供は親とは別個の個別的存在者である。子供は確かに親に似たものとして生まれる。それは胚種の中の形成の力によって身体が態勢づけられるからである。以前の立場では、この形成の力が魂と共存する形でずっと存続するとされていたのであるが、新しい立場では、この態勢づけは魂の生成までで完了し、あとはこの形成の力をも魂の内に包括するという仕方であらう。すなわち、個別の魂による、各人の固有の完全性への成長ということが強調されているのである。

結語

以上、「形成の力」についてのトマスの見解を、『命題論集注解』、『対異教徒大全』、『神の能力について』、そして『神学大全』の順に著作の年代に沿って見た。胚種の中に形成の力が存在し、それによって胎児の身体は態勢づけられ、そこから栄養的魂と感覚的魂が生じるという主張については、彼の立場は、初期、中期、後期の著作を通じて一貫していた。トマスのこの主張は、人間の産出を、神の創造の業と人間世界の生殖の系列の両方からとらえることにおいて重要なものであると思われる。人間の理性的魂は神から個別的な存在を受けるのであるが、人間は動物一般に共通的な生殖 (*generatio*) の過程をも経てこの世に生まれるのである。トマスが親の魂に由来する形成の力のはたらきを胎児の出生の始まりにおいていることは、親が子を生むという仕方になされる人間の出生と、神からの創造とによる出生を包括的に理解するための、重要な論理的根拠となっているように思われる。

後期の著作である『神学大全』では、しかしトマスの立場に一つの変更

が見られた。それはこの形成の力が、感覚的魂の産出の後には、その役割を魂に譲り渡して、消失するとされている点においてである。この変更によって、トマスは、身体の中に複数の形相的根源が存在することになる矛盾を回避している。魂は身体の唯一の実体的形相であるという主張が、これによって徹底されることになった。

トマスの新しい立場は、彼が後期、アリストテレス的な人間理解、すなわち人間の魂は形相として身体と自然本性的に結合しているという考えを、より徹底させた結果であるとも解釈され得るであろう。『神学大全』の当該箇所直前、第1部第75問題から第89問題にかけて、トマスは人間の魂と身体との自然本性的な結合を強調しているのである。また、ちょうどそれと同じ時期に、トマスはアリストテレスの『靈魂論』の註解を書いたとされている³⁷⁾。

更に付け加えるならば、トマスの新しい立場は、理性的魂の死後の存続と世の終わりにおける復活の思想と、より適合し得るように思われる。胚種の力は物的な力なのであるから、それは身体が減ぶと同時に滅びるのであり、したがって、もし胚種の力が最後まで身体の形成の能動的根源だとしたら、身体の形成のための力は身体と共に失われることになり、分離した魂の内にはその力が残されていないことになるであろう。しかしながら、復活の時には魂をその個別性の根源として身体が再び取られるとされているのであるから³⁸⁾、分離した魂が胚種の力から独立してあらゆる点で唯一の形相的根源とされている方が、論理的に整合するのではないだろうか。つまり、人間存在の形相的根源を全面的に理性的魂のみに統一させることによって、トマスにおける人間の産出理論は、より徹底したものとなるのであり、『神学大全』においてトマスがとっている新しい立場を、この徹底化の現れであると解釈することも可能であろう。

37) Torrell, op. cit., 171-174 を参照。

38) SCG IV, c. 82 および IV Sent., d. 44, q. 1, a. 1, qa. 2 (ST suppl., q. 79, a. 2) を参照。

(この論文は2001年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A によるものである。)

Virtus formativa quae in principio est in semine:
Thomas Aquinas's Theory of the Production of Human Being

Jun INOUE

This article aims to clarify Thomas Aquinas's theory of the formative power in the semen in his theory of the human production. The formative power is the active force in the semen derived from begetter's soul. According to Thomas, this force plays a vital function in the formation of the body, and also this is the active principle in the production of the nutritive soul and the sensitive soul, but it cannot be the active cause of the rational soul.

There are two aspects concerning the production of the human being in Thomas's theory of human nature: generation and creation. Each person is produced by the parents in the succession of generations, in the same way as in all animals. But, according to Thomas, the human soul does not originate in the transmission of the soul from the parents. Since it is rational and immaterial, the human soul can be produced only by God in an action of creation. Thomas, however, does not think that the human being is endowed with a rational soul at the moment of conception. He proposes some preparatory period before the infusion of the rational soul until the body is able to receive it. Before the creation of the rational soul, the embryo is formed by the formative power which is in the semen from the beginning.

In Thomas's early writings, this formative power is considered to remain the same from the beginning of the body's formation until the

end, even after the rational soul is present. However, it seems that Thomas partly changed his theory of this formative power in his later work, the *Summa theologiae*. He says that the formative power ceases to exist when the body has been formed, and the sensitive soul begins to work towards the perfection of its own body.

Thomas's change of his theory can be understood as a refinement to integrate it into his theory of the union of soul and body in human nature in which the soul alone is the substantial form of the body. And it can be seen as the result of a developed influence of the Aristotelian theory of human nature in his later teachings. Also his new stand on the formative power seems to fit better with his understanding of the separated soul and of the resurrected body, because in the resurrection the union of body and soul will be according to the condition of the soul.